



中里恒子全集

中里恒子全集 第七卷

定価二三〇〇円

昭和五十五年六月十五日印刷

昭和五十五年六月二十五日発行

著 者 中里恒子

発行者 高梨 茂

印刷者 青木 勇

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノハノ七

電話(五六一)五九二一

振替東京二一三四

検印廃止

©一九八〇

目次

夜の橋

3

他處の声

75

ぶなの木の下で

101

菊枕

127

領事館にて

153

安楽椅子

169

カリフォルニアの雪

191

くろい鳩

217

水仙

243

解 題	あ と が き	波 枕	か が り 火	芦 の 扉	冬 の 蝶 蝶	海 の わ か れ	空 席
--------	------------------	--------	------------------	-------------	------------------	-----------------------	--------

440	439	401	377	355	325	301	269
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

夜の橋

「そうだ、舟を買おう……」

銀座の人混みのなかを、やなぎはひとり歩いて、新橋の河岸へ出たとき、急にそう思った。まっくろに濁った水に、両側の遊び場の灯が、あかく映っていた。

くろいあぶらのような水に、一艘の小舟がうかび、おもく動いていた。やなぎは、橋の上に立ちどまって、あぶらの中を、やっと漕いでいるように見える小舟を、暫く眺めた。

舟のなかには、男がふたりいた。またたくように降りそぐネオンの灯を、ふたりは見向きもせず、くろい水の上を、くらい町の裏に向って漕いでいった。

やなぎは、それでも小さな貧しい舟のなかに、隔絶された世界があるのを感じた。

「……舟がいい、たしか、魚定の主人が、三人乗ボートの売物があると言っていた……そうそう、舟がいいわ……」

心のなかで理由なくきめて、それからやなぎは、弾んだ気持で家に帰った。明日は、やなぎの二十五回めの誕生日である。

用足しや、買物や、歯医者などへ出かけるのが、やなぎの外出の大部分であったが、そのよう

な、あそびとは違った、言わば生活必需品にも似た外出であっても、外から家へ戻るとき、やなぎは、なにかおもしろいことを思いつき、それにはげまされて帰宅するのが、近頃の癖になってしまった。

たしかに、やなぎの家は、たのしい雰囲気の棲家ではなかった。だいぶ広い屋敷とは言え、鍵はもちろんのこと、境界さえもはっきりしない家に、三家族が住んでいた。家屋所有者名は、やなぎの良人、尾野龍吉になっていたのだが、実際の所有者は、龍吉の姉のゆう子であった。やなぎたちの部屋は、三間つづいた、六畳、四畳半、長四畳、と比較的たっぷりした、日当りもわるくない東南の部屋を使っていたが、いつなんどき、ゆう子未亡人が庭先へ現われるかわからない。また不意に、いつ、障子をあけ、襖をあけなければならぬ立場になるかもわからない。そういう、たいしてとがめようも、断りようもない習慣にあわして、急に顔があっても、機嫌よくにこにこすることが、彼女は近頃苦痛であった。

第一に、龍吉の姉のゆう子の顔も、態度も、初めから好きになれなかったが、だんだん厭でたまらなくなり、彼女と話したりすると、焦ら焦らして癪にさわるような感情が湧いてくる。それでいて、表面はにこやかに、好感とまではゆかなくても、厭がっていないような顔つきを、自然にしようとするのが、やなぎはやりきれない。ゆう子未亡人の、どこが悪いというのではないが、それどころか、態度も多少尊大な点はあっても、行儀はよいし、顔つきだって、大きな魚のような冷めたい唇をのぞいては、容色のわるい方ではないが、これという理窟なしに、好きになれない人物なのである。また、そんな感情的な気持からはなれられないことが、一層やなぎを不快に

した。……家にかえるのが憂鬱なほど、やなぎは尾野家の雰囲気気が気に染まなかったが、この家を出て龍吉の月給で、居心地のよい家を他に求めることは現状としてむずかしい。また、出たら最後、家屋敷の権利一切は、ゆう子が掌握してゆずらないこともあきらかである。その利害関係も、すくなくらずやなぎを焦ら焦らさせた。

ところで、舟を買いいたいという気持だが、それについて、龍吉はどんな顔をするだろう、浪漫的な思いつきだと言ってくれるだろうか。そう思ってやなぎは、古びて傾きかけてはいるが、昔の生活の広さをしのばせるに足る、堂堂たる尾野家の門をくぐった。

門柱に、三つの表札が出ている。

尾野龍吉。

井村ゆう子。

坂巻六郎。

芝生の一部に、手入れ不足の菜園があつて、きゅうり、なす、とまとが草の中に茂っている。やなぎたちは玄関を使わず、庭門からいきなり、居間の縁側を出入口にしていた。その縁の上に、粘土や木片が散らばり、ざらざらしていた。やなぎはまたかと思ひながら、部屋のスイッチをひねると、すぐ筈を持った。そこへ、龍吉が戻ってきた。

「……ただいま、……出かけていたの？」

「ええ、齒医者から、一寸……」

やなぎは、今日は遅いから、飯はいらないよと言つた龍吉が、こんな時刻に帰ってきたのであ

わてた。

「お食事は？」

「まださ、明日の午後から、會社の山の家へ課でゆくんだ、だから今日はちょっと居残りをしたから、空腹だね、」

「そうなの、あした山へいらっしゃるの？ あしたは、わたくしのお誕生日だわ、」

「そうかい、」

龍吉はげげんそうに言った。やなぎも早速負けぬ氣が出て、それ以上、それだからなにかして下さいとは言わずにいた。妻の誕生日に、どうしたらいいかぐらいのことは、黙っていても、分別があろうという氣である。

「こんど厚生課で、社員健康増進のために、箱根に家を買ったのだよ、重役連中もゆくために、相当広い別荘だそうさ、それで先ず厚生課でまっ先にゆくことになったんだ、検分がてら……」

「……そう、どの辺？」

「強羅から、ちょっとはいったところだ、」

「なんて言う別荘？」

「知らないな、なんでだい？」

「あの辺の杉林のなかに、わたくし疎開してたんですもの、伯母の家があって、そこを父が借りたのよ、終戦後も、しばらく山から出られなかったわ、青庵という名のついた別荘よ……そうすると、お誕生日はわたくしひとりですごくすわけね、」

「そうなるね……」

「いいわ、」

龍吉があっさり言ったので、やなぎも勝手にしようという気になった。舟を買いたいと思った気持は、龍吉に話すのをやめた。良人は、自分に無関心になっている気がした。三家族の共同生活で、やなぎが不快と不便をしのんでいることを、龍吉は想像しようとしないのである。

「……わたくしは、あした海へゆくわ、」

「ひとりでかい？」

「わかりませんわ、」

やなぎはすいと立って、瓦斯^{ガス}の火をつけた。不意に、さみしさがこみあげて来た。青い炎が、涙のたまった眼をするどく刺戟し出した。

晴れきらぬ空に、白い雲が流れていた。波頭は乳白色にきらきら光る。やなぎは、波乗りを繰り返していた。だんだんに、毛利まさ子との距離が遠くなった。

「こんどの波に乗って、岸边へ戻ろう……」

やなぎがそう思ったとき、高い波が襲って、彼女をひと呑みにまきこんだ。やなぎは、水のかで、突然恐怖を感じた。死ぬような気がしたのである。

ようやく波をくぐって、彼女が波間に首を出したとき、ボートがそばにいた。やなぎは、思わ

ず、

「助けて……」

と手を振った。ボートが近づいてきたので、彼女は手を支えられながら、くたくたになってボートに這いあがった。舟には、中年の男と少年がいた。

「ありがとうぞんじます、なんだか溺れそうになったのです……」

「あぶないですよ、お連れはおありですか、」

「はい……」

やなぎは答えながら、唇をがちが噛んだ。鳥肌立った腕を、絶えずこすっていた。少年が、タオルを貸してくれた。やなぎは肩にタオルをかけて、すこしでも体温を守ろうとした。父親と、息子らしいふたりであった。

「……雨があがったと思うと、この強風つづきで、波が荒いですよ……」

やなぎは、無謀だったと思ったが、思いきりなにかにむかっていったあとの、快い疲労に満足した。ボートは岸近くなった。やなぎは礼を言って、水のなかを歩きながら、砂浜へあがった。

「どうしたの……」

すぐに、友達の毛利まさ子が近寄って来た。

「あやうく、溺れかかったわ、死にそうな氣持って、全く麻酔のようよ……」

「やなぎさん、あなたすこし変よ、まるで波の山にぶつかっていったわ……」

「へん？ どうして？」

「説明できないけれど……波とあそぶという態度ではなかったわ、なにかあったかいもの食べましょう。」

やなぎは、へんな女になりたくなかった。ひとを恐わがらせるものが、自分の性格のなかにあることを、やなぎは、うすうす感づいていた。そしてそのために、絶えず表情をやわらげようと注意していることも、厄介に思った。何故そんな気になるのだろう。それほど、やなぎは、ひとに尽したい気があるのでもない。結局は、よく思われない気が、多分に彼女を不自由にした。「ね……あなたのお話ってなんなの？」

休み茶屋へはいつて、シャワーを浴びて服に着替えたとき、やなぎは、現在いっしょにいるまさに、出来るだけ親切をつくしたいと思った。友情も、一つの形式だと気づいた。やなぎは、おずおずたずねた。

「それが、およそあなたの主義に反することなの……だけど、愛に限界はないでしょう、世のなかには、計画通りにはゆかないものね、それでまた、勇気が出るのだわ……わたくしが、家族のある男性を好きになったとしたら、やなぎさん不道德だと思ってる？」

やなぎはびっくりした。この美しいまさに、適当な青年の相手がないのだろうか。

「……不道德なことをすれば、不道德よ、」

「わたくしね、それはわかっているよ、でもわかっている、実行できない場合あるでしょう……」

やなぎは、若し彼女が、次の月給日まで小遣いが足りないと言っても言うのだったら、貯金をおろ

しても、ゆっくり貸してやりたかったが、不道德な相談には、いい思案もうかばなかった。やなぎは、その男の顔を想像した。不意に、良人龍吉の顔がうかんだ。

「そういうこと、この頃多いのですってね、若いひとと、なぜ恋をしないの？」

「若いひと？ 會社のなかには、そんなひとはいないわ、みんな持参金つきか、家つきか、なにかに在る女性をめがけているわ、わたくしそんなの厭、人間対人間としてたよれる、ふとい腕の男性が好き、そのひとねわたくしの性質が好きですって……」

「ちょっと、あなたのように、タイプストとして優秀なひとが、なぜひとに頼りたいのでしょうか、わたくしは、良人にさえ頼らずに暮せるようになりたいのよ、」

「それは、やなぎさんが幸福だからよ……」

「違ふ違ふ……幸福なんて、わたくしまだつかまえたことがない……考えてもごらんさい、わたくしの誕生日で、しかも土曜日というのに、龍吉は、さっさと社員たちの旅行に出かけてしまふのよ……食べることで、気をゆるめたら、すぐ足りなくなる程度の経済で、しかも気があわないわ、」

「結婚したら、愛の形は違ってくるでしょう、それは当然だわ……わたくし結婚なんてどうでもいいの……そのひとのそばにいと、特別な執着を感じるわ……人間的な魅力なのよ、」

やなぎは、深い呼吸をした。同い年のまさ子が、こんな情感の世界に生きているのが羨しかった。人間はみな愛にあこがれている、愛を制限する権利など、誰にもありはしないのだが、しかし他人の良人や他人の妻は、自然に恋の対象からのぞき得るような不文律も、保身の秩序として

人は感得しているのである。まさ子が、いきなり不道德感を打ちあけたのも、無意識な人生の秩序からかもしれないわね。それでも、やなぎは、大胆な愛情を美しく思った。

「……仕方がないわね、理窟では抑えられないことね……幸福でしょう？」

「ええ、身寄りのなくなったわたくしが、絶望から立ちあがったのもそのひとを信じたからよ……それでも、このままではいられなくなるでしょう、だから息ぐるしくなるの、」

まさ子は、おもい口調に似合わず、晴れ晴れと海をみた。波しぶきがこまかい霧となって、ふたりの頬に降りかかった。

「だってやなぎさん、わたくしタイピストとしての仕事は、いくら上達したところで、精神的には満たされないわ、仕事はね、わたくしの生活の費用を生むだけの場所よ、」

「……精神生活は別の場所？」

「はつきり割りきっているのよ……働いていると、だんだんそうなるわ、宗教家や教育家の仕事とは違うのですもの、近頃は、教育家だって医者だって、みんなストライキをするわ、生活は生活として、人間的に解釈しなければうそよ、仕事の誇りと喜びだけで、生きてゆける世のなかではないでしょう、」

「まあ、はつきりしてるわね……」

やなぎはそう言いながら、龍吉の姉のゆう子の生き方を思いうかべた。彼女には、職業的な手腕はなかった。良人に死にわかれた女が、その生活を持続してゆくためには、なんらかの方法で収入を得るか、または再婚も手段としなければならぬのである。それで、ゆう子未亡人は、ひ

どく神経質になっていた。三十五歳であった。尾野の屋敷には、婚家が焼失して以来、一家で寄宿していたが、良人の在世中は控えめで、同居人としての限界を作っていた。それが、未亡人になると同時に、俄かに尊大になり、同情されるのが当然のように、貪慾になり出したのである。

やなぎは、この経過をずっと知っていた。そして、なにかしなければならぬという恐怖さえ覚えた。突然に良人は死ぬかも知らない、財産はいつ価値を失うかわからないとしたら、ゆう子未亡人のタイプを踏襲しないためには、なんらかの働く方法を、おぼえなければならぬであろう。……

やなぎは、ゆう子未亡人の姿を見るたびに、ああいう風にはなりたくないしとして、焦ら焦らした不安を刺戟された。

海に夕陽が射して来た。

潮風に打たれた手足が、湿っているのだった。気だるいような、ほてったからだで、やなぎとまさ子は立ちあがった。おたがいに、生活の話をし出してから、すでに、別別の人生に向っているのに気づいた。

「よかったわね、海へ来て……」

「ほんと、わたくし、今に舟を買うわ、」

やなぎは、まさ子にも、こう言わずにはいられなかった。